表１　歌劇《夢見るゲルゲ》人物の登場場面一覧

	ゲルゲ	グレーテ	王女	夢の声	ハンス	粉屋	牧師	ゲルトラウト	マライ	おかみ	ツングル	酒場の主人	カスパル	マテス	合唱／その他
声種	T	S	S	Ms	Br	Br	Bs	S	S	S	T	T	Br	Bs	―
1-1	○	○													
1-2	△	○				○	○								
1-3		○													
1-4		○			○										○
1-5	○	○			○										○
1-6	○	▲		▲											▲1
1-7	○		○												
1-8	○	○				○	○								○2
1-9	○														
2-1									△		○		○	△	○2
2-2									○		○		○	○	
2-3									○	▲			○	○	
2-4								○	○	○		○			○3
2-5								○							
2-6	○							○							
2-7	○							○			○		○	○	○4
2-8	○										○		○		
2-9	○							○	○						
2-10	○							△	○	○	○	○	○	○	○
N-1	○							○							
N-2	○	○			○			○							○
N-3	○							○							

【凡例】○＝登場し、歌が割り当てられている。／△＝登場するが、歌は割り当てられていない。／▲＝登場せず、舞台裏で歌う。

１＝2 人のテノールのソロ（2 Tenorstimmen）を含む。

２＝合唱の中のソロに、「農夫（Bauern、2-1 には『年老いた農夫（Ein älterer Bauer)』がいる)」という役名が与えられている。

３＝「農夫（Ein Bauer)」が登場する。また、「下女たち（Mägde)」が登場するが、台詞はない。

４＝合唱のうちふたりに、「若者（1. Bursche, 2. Bursche)」として短いソロが与えられている。

表２　歌劇《夢みるゲルゲ》原作と各場面の関連

Ｈ＝ハイネ「哀れなペーター」、Ｖ＝フォルクマン＝レアンダー「見えない王国」、Ｓ＝ズーダーマン『猫橋』、＊＝その他／特記事項
○＝原作と同一のエピソードがある、△＝原作とある程度の関連がみられる

幕／場	内容	H	V	S	＊
第１幕					
1	空想を話すゲルゲと、呆れ気味のグレーテ		△		
2	グレーテの父がゲルゲの境遇を話す		○		
3	グレーテの踊りの歌	△			
4	ハンスが到着し、グレーテとゲルゲの婚約を知る	△			
5	ハンスが村人たちの前でゲルゲへの軽蔑を表す		△		
6	ゲルゲが川のほとりで「物語の世界」を夢想する	△	○		1
7	「王女」の登場		○	△	2
8	村人たちが現れる				3
9	ゲルゲの逃走	△	○		
第２幕					
1	追放された男爵の話と、ゲルゲを利用する計画			○	
2	マライのゲルゲに対する好意をめぐる会話			△	
3	ゲルゲとゲルトラウトの関係と、ゲルトラウトの過去			△	
4	ゲルトラウトは村人たちの憎悪にさらされながら働く			△	
5	ゲルトラウトの独白			△	
6	ゲルゲがやりきれない思いをゲルトラウトに語る			△	
7	カスパルがゲルゲの力を借りたいと提案する				4
8	ゲルゲがゲルトラウトと縁を切るように言われて断る			△	
9（1）	ゲルトラウトの死の決意	△			5
9（2）	ゲルゲはゲルトラウトが自分を理解してくれると知る			○	
9（3）	ゲルゲとゲルトラウトの愛、目撃するマライ				
１０	村人による襲撃。ゲルトラウトを連れてゲルゲは逃走する		△	○	
終幕					
1	花咲く野原をながめるゲルゲとゲルトラウト				6
2	村人たちがふたりにあいさつする		△		6
3	ゲルゲはゲルトラウトに「王女」の姿を見る		○		6,7

第 2 幕の場の構成については、リコルディ社の総譜（EMI の CD はこの総譜に準拠している）、ピアノ・ヴォーカル・スコア、カプリッチオ社の CD でそれぞれ異なっている。ここでは、総譜の記述に従っている。

表右端の「＊」の項目で示した特記事項は、以下の通り。

１：多くの関連作品との関係が見られる。川のほとりでのまどろみもしくは夢想については『ウェルテル』（ゲーテ）、「夢のブナの木」（レアンダー）、波の描写については《人魚姫》（ツェムリンスキーの管弦楽曲）、「マールワ」（構想のみで終わった歌劇の計画）。
２：王女のイメージは《むかしむかし》、《フリードル》（断片が残っているジングシュピール）で扱われたもの。
３：この部分は直接関係のある原作は存在しないが、第 2 場での粉屋と牧師の会話および、ゲルゲとグレーテが婚約予定であるという設定に拠るものである。
４：『猫橋』にはこのような部分は存在しないが、第 1 場の村人たちの会話に基づく場面であり、基本的には『猫橋』との関連によって用意された場と考えてよい。
５：「哀れなペーター」や『ウェルテル』などに見られる死というテーマが残っている、唯一の場面である。
６：『村のロメオとユリア』（ケラー）との関連がみられる。
７：「夢のブナの木」との関連がみられる。

表 3　第 1 幕第 5 場の、ゲルゲによる夢語りの場面の分類区分と内容

区分	頁	小節数	内容	調性	拍子	備考
1	47	1-6(*1)	夢語り前段	変イ長調	3/4、4/4	第 1 幕前奏と類似
2	47	7-11	中断と、グレーテとハンスの反応	ニ短調→不定	2/4→4/4	
3	48	12-35	夢語り 1:夢からの働きかけ	ニ短調→変ホ長調	6/4→3/4→2/4	主に es-b の和音上で音楽が展開
4	49-50	36-60	村人たちの反応 1	不定	2/4	
5	50-52	61-90	夢語り 2:夢の世界の風景	ハ長調→ホ長調→不定	4/4→3/4→4/4	王女の主題、呼びかけの主題
6	52-53	91-105	村人たちの反応 2	ホ短調	4/4	h 音の保続音上で音楽が展開
7	54	106-117	「夢語り」の結び	ホ短調	4/4	大部分が e 音の保続音上
8	54-55	118-128	ゲルゲとハンスの会話	ホ長調→不定	4/4→3/4	

この場面は、8（モデラート）以外は、速度がすべて緩いものとして設定されているため、表からは「速度」についての項目を除外した。

*1＝ゲルゲの夢語りは、第 5 場冒頭ではなく、ピアノ譜 47 頁の 5 小節目から始まる。

表 4　第 1 幕第 6 場の内容による区分

区分	頁	小節数	内容	調性	速度	拍子
1	57-60	75	川を見ながら思う	変ニ長調	中位	3/4
2	61-63	73	川から母の思い出へ移行	ヘ長調	中位（加速）	3/4(4/4)
3a	64	16	母への呼びかけ	不定	中位（減速）	3/4
3b	64	8	母への呼びかけ（女王と鏡）	ロ長調	緩（Adagio）	3/4
4a	64-65	20	「白雪姫」引用	ロ短調	やや急	6/4
4b	65-66	16	「白雪姫」結末／「夢の声」の加入	ロ短調	やや急	6/4
5	66-67	10	グレーテの声	変ロ短調	急	6/4-9/4
6	67	13	人々の声	変ロ短調？	急	2/4
7	68	16	「メールヒェンは現実に…」	ロ短調	急（減速）	3/4

表５　第１幕第７場の区分と内容

部	頁	小節	内容	ゲルゲ	調性	速度	拍	４場
1	69-70	1-20	王女「ゲルゲ！…」（呼びかけⅠ）	6, 17-20	ロ短調→ハ長調→ヘ長調→（変ニ長調）	緩	4/4	3
2	70-71	21-41	王女「咲きほこるばらの中で…」（情景Ⅰ）	40-41	ニ長調→不定	やや緩	2/4	5
3	71-72	42-60	王女「大気の中で高くまたふるえながら…」（情景Ⅱ）	56-60	ロ短調	急 → 中位→緩	4/4	—
4a	73	61-67	王女「世界よ！」（呼びかけⅡ）	—	変ホ長調→変ハ長調	緩（減速→加速）	3/4	—
4b	73-74	68-79	王女「風にそよぐ小枝の下…」（情景Ⅲ）	—	変ホ短調→変ト長調	不定	*1	—
5	74-75	80-98	王女「あなたはまだ夢見ているの？…」（呼びかけⅢ）	—	ニ短調	急→緩	*2	—
6	75-76	99-112	王女「残り火の中で燃えよ…」（呼びかけⅣ／情景Ⅳ）	—	ト長調	急	2/4	5
7a	76	113-116	王女「世界で、すばらしい世界で！」（呼びかけⅤ）	—	ハ長調→変ホ長調	緩	3/4	—
7b	76	117-120	（間奏）	—	変ホ短調	急	4/4	—
7c	76	121-134	ゲルゲ「ああ、ぼくはあなたの世界へ行きたい…」	122-134	変ホ長調→不定	やや緩	3/4-2/4	(1) *3
8	77-78	135-159	王女「ではおいで、私のゲルゲ…」～王女消滅	—	ホ短調→不定→変ホ長調→ホ短調	緩	3/4-2/4	5
9	78	160-171	ゲルゲ「ここに残って…」	160-171	ホ短調→ハ短調	中位	2/4	—
10	78-79	172-206	ゲルゲ「12 時の鐘だ…」（決意）	172-206	ハ長調→ハ短調→ホ短調	やや緩→急	2/4	—

頁＝ピアノ譜での頁数。
ゲルゲ＝ゲルゲの言葉が入る小節数。
4 場＝第 4 場の中の共通する場面（数字は、表 3 の区分による）
（　）＝（　）内の調への変化が示唆されるが、その調の主和音は現れない。

*1＝5/4、4/4、3/4 の間で無原則に入れ替わる（ひとつの拍は、長くても 2 小節しか保持されない）。
*2＝4/4、3/4、2/4 の間で無原則に入れ替わる。
*3＝第 4 場の 1 と同じ主題が用いられているが、類似しているのは第 4 場ではなく第 1 幕前奏である。

表 6　第 1 幕第 9 場の区分と内容
※頁数・小節数は他の表と同じくピアノ譜に従うが、第 9 場の開始箇所は総譜の判断に従う。
この部分は、全体でゲルゲの決意が語られているため、ここでは「内容」は音楽面を中心として記述する。

区分	頁	小節数	内容	調性	拍子
1	83	1-9	ゲルゲの理念	イ長調	6/4-3/4-2/4
2	83-84	10-22	第 1 幕第 7 場・4b の再現（世界への呼びかけ）	ニ短調→ヘ長調	＊
3	84-85	23-31	第 1 幕第 7 場・6 の再現、王女の呼びかけ	ト長調→不定	4/4
4	85	32-39	休止＋グリッサンド、「王女／ゲルトラウトの主題」と「王女の呼びかけの主題」による結び	ニ長調	4/4

＊5/4、4/4、3/4 の間で無原則に入れ替わる。最後は 2/4 となる。

表 7　第 2 幕第 6 場の区分と内容

（頁、小節数欄の[　]内は、ピアノ譜になく、総譜にある部分の頁・小節数。）

区分	頁	小節数	内容	調性	速度	拍子
1	114-115	1-27	ゲルゲ登場、ゲルトラウトの近況	ホ短調→変ホ短調	中位	3/4-4/4
2	115-116	27-65	ゲルゲの語り（孤立するふたり）	変ホ短調→ニ短調	中位	3/4
3	116-118	66-102	ゲルゲの語り（自虐）、なぐさめるゲルトラウト	ヘ短調→不定→ハ短調	中位	2/4-3/4-2/4-3/4
4	118-119	103-152	ゲルゲの語り（自虐）	ニ短調→不定→（ハ短調）	急	3/4
5	119-120	153-171（＊1）	ゲルゲの語り（夢と理念）	変イ長調→イ長調	急	6/4-4/4-6/4
6	120-123	172-240	ゲルゲの語り（世界に意味はない）	不定（しばしばニ短調が現れる）	急（結尾で減速）	3/4
7	123-124	241-260	ゲルトラウトがゲルゲをなぐさめる	変ロ長調→変ホ長調	中位	4/4-3/4-2/4-3/4
8	124-126	261-299	ふたりの対話、ゲルゲを落ち着かせるゲルトラウト	不定→変ニ長調	中位	3/4-4/4-3/4-2/3-3/4
9	126-127	300-323	川辺の回想	嬰ハ短調→ホ長調	中位	3/4
10	127-128	324-338	昔考えていたことと、今の状態	ホ長調→不定	中位	4/4
11	128[265-269]	339-345 [339-363]	間奏、第 1 幕第 7 場 4b の再現→村を去ることを勧めるゲルトラウトと、受け入れないゲルゲ	変ホ短調→不定	急	（＊2）
12	[269-271]	[364-378]	ゲルゲの、いるべき場所がないという意識	変ホ短調	中位（＊３）	4/4

＊1：5 では、歌とオーケストラで小節の区分が異なる部分がある。ここでは、オーケストラの小節数を記載した（*AZTG-Par*, S. 246-247. による）。

＊2：2/4,3/4,4/4 が不規則に現れる。

＊3：総譜には、「幅広く（breit）」とのみ書かれており、具体的な速度指定はないが、直前の部分との関係から、中位程度の速さが想定されていると考えられる。

表８　第２幕第６場の区分と内容

区分	頁	小節	内容	調性	拍子	備考
1	193	1-11	夕べの喜び	変ホ長調→変ニ短調（不定）	4/4	Es 保続音、夕べの喜びの主題
2	193-195	12-36	鐘の音、「奇跡の国」についての話	イ短調→ハ長調→ホ長調	4/4	夕べの喜びの主題→王女の呼びかけの主題→ゲルゲの主題
3	195-197	37-76	ゲルトラウトがさまざまなメールヒェンに思いを馳せる	ホ短調→不定→ホ短調	6/8	第１幕第６場の語りの回想
4-1	197-198	77-84	ゲルゲの主張：人の心がメールヒェンを生み出す	変イ長調	6/4	ゲルゲの理念の主題
4-2	198-199	85-94		変ホ短調→不定	4/4	村人／世界の主題（第１幕第７場の回想）
4-3	199-200	95-113		ニ短調→変ホ長調	（＊１）	
5-1	200-201	114-123	ゲルトラウトを得た喜びと、彼女とふたりだけの世界について	変ホ長調→不定	4/4	夢の世界の主題、夕べの喜びの主題
5-2	201-204	124-170	ゲルトラウトの髪に花を挿す	イ短調（不安定）→ハ長調→変ホ長調→不定	4/4-3/2-4/4	2 の再現→鐘の音→風の音、忍びこんでくる川の響き
6	204	171-183	ふたりは手に手を取って歩き出す	ト短調→変イ長調（不安定）	3/4	第１幕第６場で現れたフレーズ
7	205-207	184-226	月光が綾なす川のほとり。王女の思い出	変ニ長調	3/4	第１幕第６場（川の場面）の回想
8	207-209	227-279	ゲルゲはゲルトラウトの中に王女の姿を見出す	ホ短調→不定	3/4	第１幕第７場（王女の呼びかけ）の回想
9	209-212	280-321	「一緒に夢見よう、夢見て遊ぼう」	不定→イ長調（一瞬）→不定→ニ短調（不安定）	（＊２）	解決されない和音の積み重ね

＊１：4/4、3/4、5/4 が不規則に現れる。

＊２：4/4、6/4、3/4 が不規則に現れる。（開始時は 4/4、終結では 6/4）

図

図 1

ツェムリンスキーからシェーンベルクへの手紙、1901 年 12 月 28 日の 2 ページ目。アルマ・シンドラーのマーラーとの婚約について書かれた部分を含む。（*ABAZ*, p. 99）

図 2-1　《夢見るゲルゲ》第 1 幕・第 2 幕の物語のサイクル

図 2-2　《夢見るゲルゲ》エピローグの物語のサイクル

ツェムリンスキーの歌劇・《夢見るゲルゲ》をのぞく 7 作品の概要

（1）《ザレマ、コーカサスのばら　Sarema, die Rose vom Kaukasus》（1893-95）

原作：ルドルフ・フォン・ゴットシャル（Rudolf von Gottschall, 1823-1909）の小説『コーカサスのばら　Die Rose vom Kaukasus』（1852）
台本：不明（作曲者の父、アドルフ・フォン・ツェムリンスキー（Adolf von Zemlinsky, 1845-1900）との説あり）
作曲：1893-95 年
初演：1897 年 10 月 10 日、ミュンヘン宮廷歌劇場
その他：1895 年に、新作歌劇を募集するルイトポルド賞に提出、入賞。1899 年に出版されたピアノ譜は、シェーンベルクが編曲したもの。

登場人物

ジェリコフ（Bar）	ロシアの将軍
ゴドゥノフ（Bs）	ロシア軍の隊長
ザレマ（S）	チェチェン人の娘
アムール・ベグ（Bar）	ザレマの父
息子アスラン（T）	チェチェン人の族長の息子
チェチェン人の預言者（Bs）	
合唱（ロシアの兵士たち、チェチェン人たち）	

あらすじ

チェチェンの地に攻めこんでいるロシア軍の野営地で、将軍ジェリコフがゴドゥノフを相手に、チェチェン人の娘ザレマをコサックの襲撃から助け、連れ帰った経緯を語る（第 1 幕第 1 場）。ザレマは自分の民族と敵対するロシア人ジェリコフを愛してしまったことに苦悩している。ジェリコフがロシア皇帝の命で帰国することになったと知り、彼女はジェリコフについて故郷を去る決心をする（第 1 幕第 2 場、第 3 場）。ザレマがひとりになったところに、彼女を愛しているアスランが現れ、チェチェン人が奇襲をかける計画があると告げて、連れて帰ろうとする（第 1 幕第 4 場）。しかし、ジェリコフと兵士たちが現れて、アスランは捕らえられてしまう（第 1 幕第 5 場）。ザレマはアスランの助命を懇願するが、彼女を自分の奴隷同然に思っているジェリコフは、その頼みを一蹴する。アスランを救うために、ザレマはロシア人の野営地を立ち去り、チェチェン人の陣地へと向かう（第 1 幕第 6 場、第 7 場）。

チェチェン人たちが預言者の指導のもとでアラーに祈りを捧げている（第 2 幕第 1 場）。そこにザレマが現れ、アスランが捕らえられ、処刑されようとしていると告げる（第 2 幕

第 2 場)。ザレマの父アムール・ベグは、ロシア人のもとに奔ったザレマの言葉を信じようとしないが、彼女の心を見抜いた預言者は、予定より早くロシア軍を攻撃するように命令を下す。アムール・ベグもザレマと和解し、チェチェン人たちは進軍を開始する（第 2 幕第 3 場)。

ジェリコフはアスランに、命を助ける代わりにチェチェン軍の居所を教えるように迫るが、彼は答えない。そこに伝令が現れ、チェチェン人の急襲を告げる（第 3 幕第 1 場)。チェチェン人たちはたちまちロシア軍を打ち破り（第 3 幕第 2 場)、アスランを救出し、ザレマを称える。ザレマは逆に捕らえられたジェリコフの助命と解放を嘆願し、情にあついチェチェン人たちは受け入れる。するとザレマは、ナイフで自分の胸を刺して死ぬ。彼女はそれでもジェリコフを愛していたのだ。チェチェン人たちはザレマのために祈りを捧げる（第 3 幕第 3 場)。

（2）《むかしむかし　Es war einmal》（1897-99）

原作：ホルガー・ドラックマン（Holger Drachmann、1846-1908）の喜劇
台本：マクシミリアン・ジンガー（Maximilian Singer、1857-1928）
作曲：1897-99 年
初演：1900 年 1 月 22 日、ウィーン宮廷歌劇場
その他：マーラーがウィーン宮廷歌劇場に取り上げ、指揮した。アルマ・シンドラーが日記で、この歌劇を観たことについて書いている。

登場人物
北の国の王子（T）
イルリア国の王女（S）
イルリア国王（Bs）
パスカル（Br）　　王子の随行者
求婚者のひとり（T）
衛兵（Br）
隊長（Bs）
森番（Bs）
布告官（Bs）
合唱：侍女たち、村娘たち、学生たち、廷臣たち、行商人たち、町の人々、兵士たちなど

あらすじ
イルリア国の王女は、続々と訪れる求婚者たちを誰も気に入らず、片っ端から追い返し

ている。北の国の王子もそのひとりで、彼女の美貌を称えようとするが、王女は同じことばかり聞かされるくらいなら市場のつぼ売りになるか、一番貧しいこじきの妻にでもなるわ、と言って求婚を断る。王子は一計を案じ、カスパルと共にジプシーの母子に変装する（プロローグ）。

王子とカスパルは、王女が侍女たちと庭に出てきて遊び始めたときを見計らって風変わりな歌を歌い、王女の関心を引く。ふたりはさらに手品や「予言のやかん」を使って王女を誘い出す。王子はキスをもらえるなら「予言のやかん」を譲ると持ちかけ、王女は好奇心に負けて王子にキスをする。ちょうどそこに、パスカルに連れられて国王が現れ、王女がジプシーの男にキスをしているのを見て立腹し、この男と結婚するように命じる。王子はいやがる王女を連れて立ち去る（第 1 幕）。

王子は王女を、自分の国の森にある小屋へと連れてくる。日が暮れ、王子が森に猟に行ってくるといって出かけたために、王女は小屋でひとりぼっちになる。彼女は小屋で王子の歌う民謡に耳を傾け、考えにふけっているうちに、自分の中で彼への想いが増していくのを感じる。すると銃声が響き、王子が隊長と森番に追われて逃げこんでくる。王女は彼を追ってきたふたりに、自分の夫は病気で寝ていると嘘をつき、そこに現れたカスパルが嘘の証言をするので、隊長と森番はそのまま立ち去る。危機は去り、王女は今や、自分が夫を愛していることを知る（第 2 幕）。

北の国の城下町で、王女はつぼ売りの出店を開いている。そこに兵士に変装した王子が現れ、王女に一目ぼれをしたふりをして、お金をやるからキスしてくれと迫り、断られると暴れ始める。大騒ぎになったところに布告官が現れ、王子が結婚相手を探すことになったと告げる。条件は用意された花嫁衣裳がぴったり合うことだ。娘たちが次々と立候補するが、用意された花嫁衣裳はその誰にも合わない。そこに本来の姿に戻った王子が、王女を見つけて服を着せたところ、ぴったりだということが分かる。王子は彼女に一目ぼれしたふりをして求婚するが、王女は自分はこじきの妻でいる方がいい、と言って断る。そこで王子が妻の名を呼ぶと、王女は彼が自分の「夫」であると気づく。ふたりは改めて王子と王女として結ばれ、人々の祝福を受ける（第 3 幕）。

（３）《馬子にも衣裳　Kleider machen Leute》（1907-09）

原作：ゴットフリート・ケラー（Gottfried Keller、1819-1890）の連作小説《ゼルトヴィーラの人々　Leute von Seldwyla》（1856）の 1 編
台本：レオ・フェルト
作曲：1907-09 年、改訂版 1922 年
初演：1910 年 12 月 2 日（ウィーン・フォルクスオパー）、改訂版 1922 年 4 月 20 日（プラハ新ドイツ劇場）

登場人物

ヴェンツェル・シュトラピンスキー（T）	ゼルトヴィーラ出身の仕立屋
シュトラピンスキーの師匠（Bs）	
仕立屋仲間 1、2（T、Bs）	
郡長（Bs）	
ネットヒェン（S）	郡長の娘
メルヒオール・ベーニ（Br）	ゴルダッハの商人の代理人
アダム・リトゥムライ（Bs）	公証人
オイラリア・リトゥムライ（A）	アダム・リトゥムライの妻
ポリュカルプス・フェーダーシュピール（T）	町の書記
ヘーバーライン社の上の息子（T）	
ヘーバーライン夫人（S）	
ピュチュリー・ニーヴェルゲルト家の下の息子（Bs）	
旅館「秤亭」の亭主（Bs）	
旅館のおかみ（S）	
旅館の料理女（A）	
旅館のボーイ（S）	
御者（Br）	
下男（T）	
出し物の幕開けの語り手（語り）	
合唱（ゴルダッハとゼルトヴィーラの人々）	

あらすじ

ゼルトヴィーラの仕立屋シュトラピンスキーは、働いていた店が経営不振だったために、ふたりの仕立屋仲間と一緒に親方のもとを出る。ふたりの仲間と別れてひとりで旅を続けているところに、馬車が通りかかる。御者に誘われて、彼はゴルダッハの町まで馬車に乗せていってもらうことにする（プロローグ）。

ゴルダッハの旅館の前でベーニがネットヒェンを口説いているところに、シュトラピンスキーの乗った馬車が到着する（第 1 幕第 1 場、第 2 場）。御者はふざけて、馬車に乗ってきた「ポーランドの伯爵」が払ってくれると言って、飲み代を払わずに出て行ってしまう。旅館の人々は彼の言葉を信じ、シュトラピンスキーを丁重にもてなすので、一文なしの彼は不安になりながらも、なしくずしに接待を受けてしまう（第 1 幕第 3 場）。旅館の常連であるゴルダッハの「名士」たちは、伯爵の噂を聞いてシュトラピンスキーに取り入ろうとする。最後に郡長がネットヒェンとベーニを連れて現れる。シュトラピンスキーとネットヒェンは互いを見てたちまち恋に落ち、ベーニはその様子を嫉妬に燃えながら見ている。馬車が「伯爵」の持ち物を全て積んだまま出発してしまったということになったために、

シュトラピンスキーは宿屋で、必要なものをすべて提供してもらえることになる（第 1 幕第 4 場）。

郡長がシュトラピンスキーを招待した食事の席で、ネットヒェンはかわいらしい歌を歌い、ふたりの愛は深まっていく。その様子を横目に、ゼルトヴィーラで真相を探ってきたベーニは陰謀をめぐらせている。もてなし続きで困ったことになったと思っているシュトラピンスキーは、折を見てこっそり逃げ出そうとしたところで、ネットヒェンと出くわしてしまう。彼はネットヒェンに別れを告げようとするが、それがいつの間にか愛を確かめあい、郡長の前で結婚を宣言することになる。話はたちまち大きくなって、町をあげての婚約祝いが執り行われることになる（第 2 幕第 1 場）。婚約祝いの会場に、ゴルダッハの人々だけでなく、かつてシュトラピンスキーが住んでいたゼルトヴィーラの人々まで現れる。ベーニは祝宴の余興として、ゼルトヴィーラから来た人々に、パントマイム《馬子にも衣裳》を上演させる。このパントマイムは身分の高い人間のふりをしている仕立屋の物語で、シュトラピンスキーのことが揶揄されている。最後に彼の師匠の仕立屋と以前の仲間が登場して、無邪気にシュトラピンスキーとの再会を喜ぶので、彼の正体がゴルダッハの人々にも知れ渡ってしまう。怒りとあざけりの声を上げる人々に対して、シュトラピンスキーは、相手の身分によって態度を変える人々をなじり、自分が責任があるのはネットヒェンに対してだけだ、と言う。人々が立ち去った後、シュトラピンスキーはネットヒェンに別れを告げてゴルダッハを去ろうとする。ネットヒェンは彼を引き止め、自分の愛が変わらないことを告げる（第 2 幕第 2 場）。

上記の登場人物とあらすじは、改訂版に拠る。改訂版での主な変更点は、3 幕構成から 2 幕構成への変更、郡長の家の場面がゴルダッハの人々の思惑が行き交う様子の描写からネットヒェンの歌に変更、結末がシュトラピンスキーとネットヒェンが人々に囲まれて祝福されるものから、ふたりだけで愛を確かめ合うものへの変更など（ふたつの版の比較については、ボーモントの著作（*ABAZ*, pp. 170-173.）を参照した）。

（4）《フィレンツェの悲劇　Eine Florentinische Tragödie》（1915-16）

原作／台本：オスカー・ワイルド（Oscar Wilde、1854-1900）の戯曲（A Florentine Tragedy、1894、翻訳はマックス・マイアーフェルト（Max Mayerfeld、1875-1940））。
作曲：1915-16 年
初演：1917 年 1 月 30 日（シュトゥットガルト）

登場人物

グイド・バルディ（T）	フィレンツェ大公の息子
シモーネ（Br）	商人

ビアンカ（Ms）　　シモーネの妻

あらすじ

16 世紀のフィレンツェ。商用から帰宅したシモーネは、妻ビアンカが見知らぬ男、グイドと仲むつまじくしているところを目撃する。シモーネはふたりの関係を見抜きつつも知らない風を装い、グイドを接待し、次々と商談をもちかける。グイドは言葉のはしばしでビカンカとの関係をほのめかせ、シモーネは皮肉をまぜながら、へりくだった言葉を言い続ける。ビアンカはシモーネを嫌い、グイドと親しそうにしている様子を露にする。シモーネの暗い皮肉に我慢できなくなったグイドが帰ることにすると、シモーネは彼の剣に目をとめ、自分の持ち物を盗む者は殺すという信条を口にして、決闘を申しこむ。ビアンカはグイドにシモーネを殺すようにけしかけるが、最後にはシモーネがグイドを絞め殺す。ビアンカはシモーネに、「どうしてあなたは私に、そんなに強いって言ってくれなかったの？」とたずねる。シモーネは「どうしてお前は私に、そんなに美しいと言ってくれなかったのだ？」とたずね返し、ふたりは口づけを交わす。

（５）《小人　Der Zwerg》

原作：オスカー・ワイルドの小説『王女の誕生日　The Birthday of the Infanta』（1889）
台本：ゲオルク・クラーレン（Georg Klaren、1900-1962）
作曲：1919-21 年
初演：1922 年 5 月 28 日（ケルン）
その他：1981 年に、アドルフ・ドレーゼン（Adolf Dresen）による改訂版が《王女の誕生日》の題名で上演される（ハンブルク）。

登場人物

スペイン王女ドンナ・クララ（S）
侍女ギータ（S）
小人（T）
侍従長ドン・エステバン（Bs）
侍女たち（S、S、Ms）
女声合唱（侍女たち、王女の遊び友だち）

あらすじ

王女の誕生日のパーティーのために、ドン・エステバンと侍女たちが準備をしている。王女に贈られたさまざまなプレゼントの中には、奇妙な「小人」があるという。やがてパーティーが始まり、その最中に、小人が人々に披露される。人々が小人の醜さに驚く一方

で、小人は王女の美しさに魅了される。小人が王女をたたえる歌を歌うと、人々は小人の醜さをあざ笑うが、ギータだけは小人の歌に感動する。

王女は小人の奇妙な姿を面白がっているだけだが、小人は王女への愛を訴え、自分が英雄として王女を救い出す物語を妄想する。やがてダンスが始まり、王女は小人と踊り、彼に白いバラを与える。ギータは小人に、宮廷を立ち去るように忠告するが、小人は従わない。

ひとりになった小人は、王女への思いを募らせるが、やがて部屋にあった鏡に映る、奇妙な姿の「怪物」に気付きおののく。その「怪物」が小人自身の姿だったと知ると、彼はショックを受けて倒れてしまう。そこに戻ってきた王女は、小人を愚弄して最後の打撃を与える。続いて戻ってきたギータは、小人の身に何が起きたかを知って嘆く。小人は王女にもらった白いバラに手をのばしたまま息絶える。

（６）《白墨の輪　Der Kreidekreis》（1930-32）

原作:クラブント（Klabund、本名アルフレッド・ヘンシュケ（Alfred Henschke）、1890-1928）の戯曲による 3 幕の歌劇
台本：作曲者
初演：1933 年 10 月 14 日（チューリヒ）
その他：1933 年にシュトゥットガルトで予定されていた初演が、ナチスの政権奪取の影響で中止されている。

登場人物

チャン・ハイタン（S）	
チャン夫人（A）	ハイタンの母
チャン・リン（Br）	ハイタンの兄
トン（T）	茶館の主
パオ（T）	皇太子、のちに皇帝となる
マ（Bs）	役人
ユー・ペイ（S）	マの妻
チャオ（Br）	裁判所の官吏
チュ・チュ（語り）	裁判官
茶館の少女（S）	
助産婦（A）	
ふたりの苦力（T）	
兵士（T）	
兵士たち（語り）	

茶館の少女たち（黙役）
警官（語り）

あらすじ

ハイタンの父チャンは、重税を払いきれずに役人のマの家の前で首を吊って死んだ。チャン夫人は生活のめどが立たず、娘のハイタンを茶館を経営しているパオに売る（第 1 幕／第 1 景）。お忍びで茶館にやってきたパオがハイタンを見かけ、ふたりは親しくなる。ハイタンは彼に「白墨の輪」について語る。そこにやってきたマがハイタンのことを気に入り、パオとの競りに勝って、ハイタンを家に連れて行く（第 1 幕／第 2 景）。

ハイタンは男の子を産む。マの第一夫人ユー・ペイは子どもがなく、今の地位を追われることを恐れている。彼女は裁判所の官吏チャオと不倫をしているが、チャオは彼女と結ばれる見通しが立たず、彼女に服毒心中をしようと誘う。ハイタンの兄で白蓮党員のチャン・リンが、党の方針に従ってマを殺すために現れる。けれども、ハイタンが「白墨の輪」で行った占いが奇妙な結果になったために、殺すのをやめる（第 2 幕／第 3 景）。マはかつて強欲で冷酷だったが、ハイタンを愛するうちに彼女に感化され、心を入れ替える。マから自分にかわってハイタンが第一夫人になると伝えられたユー・ペイは、マの飲む茶にチャオから受け取った毒を盛る。何も知らずにハイタンは毒の入った茶をマに渡し、マは毒を飲んで死ぬ。ハイタンは逮捕され、ユー・ペイはハイタンの子を自分の子ということにして奪い取る（第 2 幕／第 4 景）。

ハイタンは裁判にかけられるが、ユー・ペイとチャオが裁判官のチュ・チュや「目撃者」たちを買収しているため、まったく望みがない。ユー・ペイが、マを殺したのは子どもの母親でない方の女だと証言し、ハイタンはそれを否定できずに死刑を宣告される。このとき、皇帝が没し、新しい皇帝が即位したことが知らされる。リンは「新しい皇帝も前の皇帝よりましということはない」と叫び、同じく死刑を宣告される（第 3 幕／第 5 景）。新しい皇帝によって、有罪となった人々と裁判官は全員、北京に呼び出される。その道すがら、ハイタンは自分の運命を嘆く（第 3 幕／第 6 景）。新しい皇帝となったパオは不敬罪を犯したリンを許し、子どもの母親を決めるために「白墨の輪の裁き」を行う。ハイタンが子どもの手を放したために、彼女が子どもの母親であり、無実であることが立証される。ユー・ペイはチャオとチュ・チュと共に連行される。ハイタンとふたりきりになると、パオは彼女に、自分がハイタンの子の父親だと告げる。ハイタンはマの家に連れて行かれた夜、パオそっくりの男と一夜をすごす夢を見たと思っていたが、それは現実だったのだ。こうしてハイタンはパオと結ばれる（第 3 幕／第 7 景）。

（7）《カンダウレス王　Der König Kandaules》（1935-未完）

作曲：1935 年-未完

原作：アンドレ・ジード（André Gide、1869-1951）の戯曲《カンドール王　Le Roi Candaule》（1901）、アントニー・ボーモントによる補筆完成（1992-95）
台本：作曲者
初演：1996 年 10 月 6 日（ハンブルク、ボーモントによる補筆版）
その他：ツェムリンスキーはアメリカ亡命時にこの歌劇の原稿を持参し、メトロポリタン歌劇場で上演されることを希望していた。メトロポリタン歌劇場の指揮者をしていた友人のアルトゥール・ボダンツキー（Arthur Bodanzky、1877-1939）がその可能性に否定的な見解を示したために、オーケストレーションは中断された。

登場人物

カンダウレス王（T）	
王妃ニュシア（S）	カンダウレスの妻
ギュゲス（Br）	漁師
トリュドー（黙役）	ギュゲスの妻
フェドロス（Br）	カンダウレス王の客（以下、計 8 人）
シファックス（T）	
ニコメデス（Br）	
ファルナセス（Bs）	
フィレボス（Bs）	
シミアス（T）	
セバス（T）	
アルケラオス（Bs）	
料理人（Bs）	
合唱（客たち、舞台裏の声）	

あらすじ

カンダウレスとギゲシュは子どもの頃、友人どうしだった。ギュゲスは今、貧しい漁師で、彼の妻トリュドーは王家の調理場で働いている（プロローグ）。カンダウレス王は祝宴で、客としてやってきた廷臣たちに、それまでヴェールに隠されていた王妃ニュシアの顔を見せ、自分だけが見ていた彼女の美貌を客たちと共有する、という計画を立てていた（第 1 幕第 1 場、第 2 場）。祝宴の食事の席で、客のひとりアルケラオスが魚の中から不思議な言葉が書かれた指輪を発見し、その魚と獲ったギュゲスが呼び出される（第 1 幕第 3 場）。ギュゲスはそのとき、王宮から酔って帰ってきたトリュドーの不始末で、自分の住む小屋が焼けてしまったところだった。ギュゲスはそれでもトリュドーを自分だけの大切なものと思っているが、セバスが前日に彼女と一夜をともにしたと言って笑うと、ナイフで妻を刺し殺す。カンダウレスはギュゲスをたたえて彼と友情を結び、彼に自分の豊かさを分か

ち与えることにする（第 1 幕第 4 場）。

カンダウレスは、財産には興味がないと言うギュゲスにニュシアの美貌を見せてやろうと思う。そこで彼はギュゲスに、魚から出てきた指輪を渡す。この指輪をはめると姿が見えなくなるので、ギュゲスはニュシアがヴェールを外したところを密かに見ることができるのである（第 2 幕第 1 場）。言われたとおりにしたギュゲスはニュシアに魅せられ、姿を隠したまま、眠っている彼女に近づいていく（第 2 幕第 2 場）。

翌朝、客たちはカンダウレスが必死になって指輪を探している、と話している（第 3 幕第 1 場）。ギュゲスは罪悪感とニュシアへの愛の間で苛まれている（第 3 幕第 2 場）。ニュシアが昨晩の情事について何も知らないまま語るので、カンダウレスは嫉妬に苦しむが、真相を言うことができない（第 3 幕第 3 場）。ギュゲスが姿を現してニュシアに一切を語ると、王に裏切られたと感じて傷ついた彼女はギュゲスに、カンダウレスを殺すように言う（第 3 幕第 4 場）。彼はニュシアの言葉に従って王を殺す。祝宴の客たちが現れると、ニュシアはギゲシュが新しい王になったと宣言する。彼はニュシアにヴェールを下ろすように命じるが、彼女は「カンダウレスが私のヴェールを引き裂いてしまいました」と言い、ヴェールを破る。ギュゲスは客たちから、新しい王として挨拶を受ける（第 3 幕第 5 場）。